

[2015年8月25日]

ABC分類導入による胃検診の在り方を探る

ABC分類では、*Helicobacter pylori* (HP) 血清抗体検査とペプシノゲン (PG) 法を組み合わせることで胃がんリスクを判定する(表)。簡便なスクリーニング法として、対策型検診や任意型(人間ドック)検診に導入が進んでいる。第56回日本人間ドック学会学術大会(7月30~31日、会長=医療法人社団相和会理事長・土屋敦氏)のパネルディスカッション「ABC分類によって、今後の任意型(人間ドック健診)胃検診は変わっていくのか」では、各施設における実施状況や課題が示され、それぞれの立場からの見解が報告された。

表. ABC分類

ABC分類		<i>H. pylori</i> 抗体価	
		陰性	陽性
ペプシノゲン法	陰性	A	B
	陽性	D	C

Aが最も胃がんなどの可能性は低く、B、C、Dの順に危険度が高くなる

(編集室作成)

リスク判定と年齢を考慮した個別の対応を

四谷メディカルキューブ(東京都)消化器内科部長の伊藤慎芳氏は、2005年5月~15年4月に同院でHP抗体検査、PG検査、上部消化管内視鏡を行った受検者6,201人(男性3,805人、女性2,396人、平均年齢53.7歳)を対象に、ABC分類の有用性と問題点について検討した。平均観察期間は2.0年であった。プロトンポンプ阻害薬使用例、胃術後例、腎不全例は除外した。

最も多かったのはA群の3,092人(50%)で、B群が1,280人(20%)、C群が546人(9%)、D群が110人(2%)、E群(除菌後)が1,173人(19%)であった。

胃がん発見率は、多い順にC(C+D)群で2.9%、E群(除菌後)が1.3%、A群が0.032%であった。胃がんが発見されたときの平均年齢は65.3歳で受検者平均よりも12歳高く、男女比は34:11であった。早期がんと進行がんの比は41:4であった。小病変や平坦な色調変化の病変が多いため、内視鏡の有用性が高いことが示唆された。

A群には若年者が多いが、高齢者では除菌歴がなく、感染が自然に終息したとみられる感染既往例が混在しているため、画像所見を活用することでリスク判定の精度が高まる。D群は未感染、現感染、感染既往、自己免疫性胃炎が混在しているため、未感染以外は個別に精査が必要である。同氏は「ABC分類は胃がんリスク評価に有用であるが、人間ドックにおいては、E群(除菌後)の設定や丁寧な内視鏡検査、HP抗体濃度やPG値を考慮した個別対応が重要になる」と述べた。

ABC各群の割合は、2000年以前は多い方からB群、C群、A群の順であったが、2000年以降は同A群、B群、C群、E群、今後は同A群、E群、B群、C群の割合になると予測されている(図1)。地域、年齢など対象の特性によって異なる

るが、大半が超低リスクになるとみられており、変化に対応した検査や指導体制が望まれる。

図1. ABC各群の変動



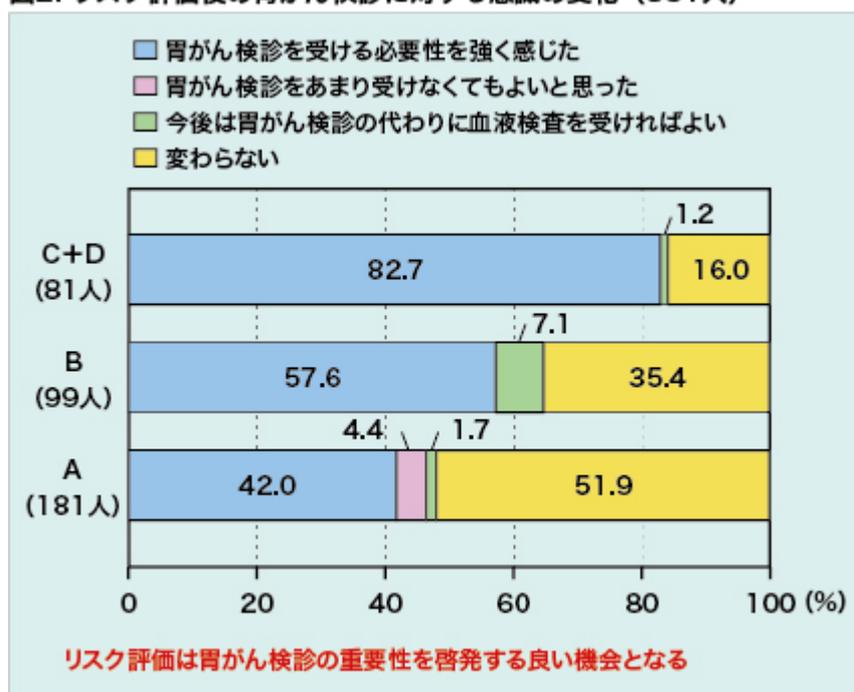
(伊藤慎芳氏提供)

胃がんリスクを自覚し、検診受診や除菌治療の動機付けとする

宮城県対がん協会がん検診センター（仙台市）では、2011年4月にABC検診をオプション検査として導入し、検診受診の動機付けと除菌治療の情報提供に活用してきた。同センター副所長の加藤勝章氏は2011、12年度のABC検診受診者にアンケートを行い、40歳以上の回答者365人（胃リスク判定A：184人、B：99人、C+D：82人）について集計した。

リスク評価後の胃がん検診に対する意識の変化について、「胃がん検診を受ける必要性を強く感じた」と回答したのはA群 42.0%、B群57.6%、C+D群82.7%と高リスク群で高かった（図2）。リスク評価は、胃がん検診の重要性を啓発する良い機会であることがうかがえた。また「今後、どのような方法で胃がん検診を受けたらよいと思うか」との問いに対して、「毎年、胃X線検査を受ける」と回答したのは、A群 53.2%、B群48.5%、C+D群32.0%で、低リスク群においても、リスク評価は検診自体の動機付けとなる可能性が示された。

図2. リスク評価後の胃がん検診に対する意識の変化（361人）



(加藤勝章氏提供)

リスク評価後の検診受診、治療の状況が把握できた293人を調査したところ、胃X線の後に上部消化管内視鏡検査（EGD）を受けたのは、C+D群で30.0%、B群で27.1%と約3割に及んだ。また、ABC検診受診前に除菌治療を受けていたのは2%（E群と分類）であったが、リスク評価を契機に新たに除菌治療を受けたのはB群の18.1%、C+D群の

47.6%と増加しており、ABC検診を契機としてその後の動向に変化が見られたことが分かった。

同氏は「任意型検診は健康意識の高い受診者が多いため、HP感染や胃がんリスクなどに関する情報提供を積極的に行い、個人の疾病リスク低減に努めることが肝要である」と提言した。

(鈴木 志織)

この記事に対するご意見・お問い合わせは、mt@medical-tribune.co.jp までお願いします。

関連記事

- ▶ 「*H. pylori*関連ディスペプシア (HpD)」の疾患概念が提案される／HP感染胃炎に関する京都国際コンセンサス会議 [2015年8月20日]
- ▶ [第50回日本消化器がん検診学会] 胃・大腸がん 検診システム再構築に向けた研究進む [2011年8月11日]
- ▶ [第7回日本消化管学会] 広がりつつある除菌療法のさらなる適応を探る [2011年5月26日]

関連リンク

- ▶ 日本人間ドック学会 (公式サイト)

 [TOPページに戻る](#)